

文化振興ビジョンを推進するための懇話会 第5回会議概要

1 日 時：平成26年1月24日（金） 15：00～17：20

2 場 所：小田原市立かもめ図書館 集会室

3 出席者

(1) 委員（10名）

畠山座長、鬼木副座長、石田委員、深野委員、牛山委員、小川委員、杉崎委員、露木委員、神馬委員、間瀬委員

(2) 行政（6名）

諸星文化部長、原田副部長、瀬戸管理監、中津川文化政策課長、諏訪部文化政策係長、高瀬芸術文化創造係長

4 傍聴者 0名

5 会議の概要

(1) 文化振興ビジョンを推進するための検討（まとめ）について
資料1、資料2に基づき、事務局から説明。

【畠山氏】

・このまとめの位置づけは、懇話会として提言をまとめて市長や文化部に提出するというわけではなく、懇話会の議論に基づき、文化政策課がまとめたということで良いのか。通常、このようなまとめであると、メンバーや開催状況は最後に記載されるものだと思う。位置づけが行政のまとめということなので、この位置にあるという理解と考える。

【鬼木氏】

・これが、懇話会からの提言や報告書でないとすると、2の懇話会についての位置が違うのではないかと思う。1から7は文化振興ビジョンの推進の考え方ということが書いてあるが、それとは別に、皆さんの様々な発言が、懇話会で出た主な意見という形で記述されたページがあって、そこに懇話会のメンバーや開催状況などを書いておいたほうがすっきりするのではないか。

【文化政策課長】

・市長からの諮問を受けて提出する答申書と行政の報告書との中間のような形式になっている。皆さんの意見をもとにと言いながら、ずいぶん集約していた形になっている。最初からこれは報告書をまとめる会議ではないということは確認しているので、懇話会での意見も入れながら、再度、編集したい。

【鬼木氏】

- ・「3 文化振興ビジョンの推進体制」の前に、懇話会の目的ではなく、ビジョンに書いてはあるが、なぜ文化振興ビジョンを推進するための体制を検討しているのかという目的を記述しておいたほうが良い。これによって小田原の文化を創っていくということを手厚く書いたほうが良い。

【石田氏】

- ・5は「ビジョンを推進するためのプラットフォーム」に直したほうが良いのではないか。

【杉崎氏】

- ・文化振興ビジョンの話のときには、小田原らしさとはないかということが繰り返し話し合われてきた。小田原市の文化振興ビジョンなので小田原らしさがあるのプラットフォームである。まとめがプラットフォームに行き過ぎている感がある。小田原らしさを表現するための体制がプラットフォームであるというストーリーを持った流れにしたほうが良い。

【石田氏】

- ・今までの議論を落とし込んで、最後の条例まで、まとめ全体が繋がるようなストーリーを持った流れにしたほうが良い。

【畠山氏】

- ・情報プラットフォームは管理者が必要なのではないかという議論があったと思う。繋ぎ役は文化政策課になるのか、その記述をしてほしい。

【深野氏】

- ・これは、懇話会の議事録でもまとめでもなく、文化政策課の取り組みや進め方を示したものとすると、「文化振興ビジョンを推進するために具体的にプラットフォームを設定して事業を進めていったらどうか。」という考え方を表わしているものだとして理解するが、文化振興ビジョンの志、何をどう目指していくのかを書いたほうが良い。いままで議論されてきたことではあるが、それを実現するためにプラットフォームが必要という流れにならないと、これだけ見ると方法論のみをレポートしているものになってしまう。目的や志は繰り返し書かれたほうが良い。いままで抽象的な議論だったが、具体的などころが見えてきたという議論がされてきたと思う。施策、政策という形で書くべきではないか。プラットフォームだけだとさびしい。

【小川氏】

- ・「4 プラットフォームとは」で、「そこには目的があり、」とあるが、プラットフォームに目的があるのではなく、目的を共有するというより、活動を共有するというのではないのか。何から何まで小田原の文化政策の傘に入るわけではない。

【杉崎氏】

- ・全体図だが、小田原らしさなどいろいろなテーマがあって、そのテーマで例えば学校はどうするか、なりわい分野はどうするかなど、プラットフォームの作り方を具体的に書

いたほうがイメージしやすいのではないか。

【畠山氏】

- ・「目的によって様々なつながりの PF が存在する」というところが気になる。小田原のために何ができるかを議論する場なのではないか。文化振興ビジョンの将来像がプラットフォームの目的だと大きすぎてしまう。人とまちを輝かすための活動の場がプラットフォームということも言える。

【鬼木氏】

- ・目的という言い方もあるが、プラットフォームは、課題解決のための場ということで、文化振興に関わる課題を解決するための道筋を探るために集まる場であるということもできる。ビジョン全体図でプラットフォームを表わそうとすると難しいかもしれない。小田原市内で活動されている方々が様々な問題を抱えている。その解決の道を探れる場がプラットフォームであるのではないか。課題は大きい課題である必要はなく、例えばひとつの場所の利用調整のような小さな課題でも良い。個別の課題ごとに関係する人たちが一緒に集まることに意義がある。地域プラットフォームも、課題があって、知恵を出し合うことで意義が出てくる。文化でもそれが可能だと思う。課題を見つけて集まり、それが寄せ集まって全体をカバーするようになるのではないか。

【文化政策課長】

- ・地域コミュニティの緩やかな連携づくりの仕事を以前していたが、まさに課題解決のため、プラットフォームは手段である。集まりやすいのは福祉、安心・安全、子どもに関する課題であった。様々な目的、課題があるが、集まってみて議論していく。文化も同じで、担い手の問題、今までの活動を続けていくこと、芸術文化創造センターをただの箱にしてはいけないとか、それによって集まってくる団体等で解決していくという整理だと思う。

【畠山氏】

- ・文化によって、小田原をもっと輝かせるための解決手段である。そのひとつに情報のプラットフォームもあるし、いろいろな場面でプラットフォームという手段を使って集まってやってみるといことになるだろう。

【石田氏】

- ・文化振興ビジョンの中に文化振興の根底にあるものという記述があり、そこにプラットフォームの方向性、考え方が簡単に書かれている。自主性の尊重、すべての人に開かれていること、経済と文化の循環、経済だけでなく市民社会という言葉に置き換えてもいい。これを認識してまとめていくのが近道なのではないか。
- ・全体図は、考え方を凝縮していくべきで、線のつながり方などが説明できなければならぬ。周りを囲む円はいいが、なぜ線が繋がっていないところがあるのかなどが気になるところである。

【畠山氏】

- ・真ん中がプラットフォームで全部と結びついているのだったらいいのか。そうすると自主性がなくなり、中央集権的か。

【文化政策課長】

- ・事務局でも議論したが、あくまでも例示の意味で線が書いてある。

【石田氏】

- ・やはり説明がないとわからないというのは、考えたほうがいい。それぞれの分野が、均等・対等な位置づけであるということが表現できていたほうがいい。図はあらゆることを如実に表わしてしまう。

【神馬氏】

- ・風船を束ねるような形にすることも考えられる。

【文化部管理監】

- ・小田原らしさを考えると文化は幅広い定義であり、それが文化振興ビジョンになっている。まず、その考え方を知ってもらう必要がある。ビジョンをどう推進していくかということ議論していく中で、プラットフォームという言葉が出てきた。今年はそのプラットフォームについて議論してきた。全体図は、ビジョンに関わる分野はいろいろあるということを示している。その上で、ビジョンを進めていくのに、情報の共有が必要で機能的な形ではあるけれど、情報プラットフォームからはじめて、多くの人に知ってもらう、地域や学校にも繋がるということをしていく。一方で小田原の文化を知っていただくということで永井管理監の講演なども行った。しかしそれだけではなく、そもそも文化振興ビジョンは何のために作られたのかということを示した上で、今年推進体制について議論してきた。全体のまとめとしては、文化振興ビジョンから脈々と繋がり、今年の懇話会の議論という流れにしてひとつの提示をしていくことになると思う。いままでのビジョンの議論の流れで、今年度はこのような議論をして、情報プラットフォームをやっていくことになったのが今年のまとめかと思う。図も説明をつけないとこれだけではわからないだろう。

【杉崎氏】

- ・ビジョンには二つのアプローチが設定されている。それを具体化するためにプラットフォームを設定するというほうがわかりやすい。全体図に地域プラットフォームの例を入れればわかりやすいのではないか。実際に課題があったときにプラットフォームを利用してくださいというほうがわかりやすい。

【文化部長】

- ・文化振興ビジョン策定の段階で、今後検討していくべきところで、推進体制と効果測定が上がっていた。その流れの中で、プラットフォームという話が出てきているわけであるが、推進体制の整備を話し合う中で、プラットフォームそのものを目的にしてしまうと難しい。どのような課題があって、どのような人が集まるべきなのかということがあって手段としてのプラットフォームを考えないと抽象的な話で終わってしまうことにな

る。昨年度は推進体制のイメージなども模索してきたが、結果として活動の主体同士が知り合い、繋がるということが求められているという考え方から、まず情報から始めるという話になった。これが昨年度までの話である。今年度は情報発信の具体的な手立てとして、メール配信などを始めたりしたので、文化振興ビジョンの推進の手がかりを求めながら議論をしたほうがいい。

- ・ 情報発信をまずやっていくという話は、市民、行政が情報を共有できていないという実情があることから始まっている。団体からの意見聴取という具体的な取り組みを今年度行い、そこから見えてきた課題を手掛りに文化振興ビジョンの目指しているところに近づけるのか、抽象的な概念だけだと難しいが、情報発信のあり方や団体の課題から具体的な取り組みを手がかりとして議論したほうがいいのではないかと思う。
- ・ 文化振興ビジョンを推進するために具体的に行動計画としてアクションプラン作りという話もあったが、もう少し具体性がある計画により、具体的ななどという集まりでなければならぬかというプラットフォームのあり方も議論できるのではないかと思う。
- ・ 地域プラットフォームについては、既存の団体や役を与えられて人だけでは解決できない課題や目的が見えてきた。文化の場合は地域の防災や福祉と比べて、関係者の切迫度が違うので、課題を共有することからはじめないといけなないので、具体性のある議論が必要である。文化の話は抽象的な話と具体的な話を رفتりきたりしながら出来上がっていくことになると思う。

【畠山氏】

- ・ 6以降のところで意見をいただきたい。

【鬼木氏】

- ・ メルマガを送っていただいているが、もっと内容が充実すると良い。メルマガの位置づけをどうするかということだと思う。ハブ機能に集まった情報がメルマガによって外に出て行くという形になっているが、ほかにも広報など様々な媒体があると思う。例えばウェブサイトは網羅的な情報、紙媒体、メルマガなど、媒体ごとに目的をはっきりさせたほうがいい。例えば、今後レポーターが取材したものを紙媒体にする場合は、選ばれた情報をレポーターの目による厳選されたものにする。メルマガはメルマガにしかできない今が旬のリアルタイム情報などがほしいところである。ほかでも見たなという情報だけでなく、例えばこのチケットはもう売り切れているけど、ここに行くとなるとか、リンク先などだけではなく、メルマガを見てはじめて知る情報が欲しい。
- ・ 文化のホームページは、市が管理しないホームページにしたらいかがか。行政は行政で情報発信が必要だが、文化に関しては、民間のウェブサイトに載せた方が、浸透しやすいのではないかと思う。民間に委託するなどにより運営してもらうことはできないか。公平性などがまず先に来ると、文化の情報は面白くなる。これが面白いという情報がほしい。編集・発行する人は別にして、基本だけ決めておくくらいのほうが面白い情報

発信ができるのではないか。

- ・文化資源発掘ワークショップだが、小田原市民の方々はもちろんだが、小田原市外の人に小田原のいいところを発見してもらうことも必要なのではないか。私は今日ここに来るときも始めて鴨宮駅に降りた。新幹線発祥の地などを見ながら、かもめ図書館まで歩いてきた。小田原市の人にとってはあたりまえのことも外部の人にとっては新鮮である。文化事業レポーターも市外の人に委託しても良いのではないか。市内の人と気づき方が違うと思う。
- ・文化事業レポーターの活動であるが、お互いにやっていることを知らないということが、情報プラットフォームのきっかけであるのだが、共有も大事だが、情報を発信する気がないが地域の文化として重要だということがある。レポートの前に調査する人、探っていく人という役割があってもいいのではないか。プラットフォームに持ち込まれる情報だけではなく、探りながら地域の中に出て行く人は必要なのではないか。住んでいる人も気づいていない情報を探っていく。そのような役割も期待したい。
- ・芸術文化創造センターの開館に向けてのプラットフォームだが、開館までの間、市民の皆さんとセンターの方向性を作っていく重要な時期に来ていると思う。センターの運営に繋がるようなプラットフォームになることを期待したい。
- ・26年度の検討事項で条例の検討とあるが、条例にしたほうがいいのか、アクションプランのようなものがあるのかという議論は必要だ。行政の役割を考えていくに当たり、他の自治体と意見交換会を開催するなど、行政の立場に絞った研究会のようなものを作ることを提案したい。

【畠山氏】

- ・情報発信はFM おだわらやケーブルテレビなどだろうか。

【石田氏】

- ・情報受発信プラットフォームは、言いにくい。意味は良くわかるが、意味を込めなくても良いのではないか。情報プラットフォームのイメージ図はわかりやすい。イメージ図は言葉よりも一人歩きしやすい。情報プラットフォームの図はいろいろな人が発信し、網目のように広がっていくということが現れていると思う。すべての人が受信者にもなるし発信者にもなるということが現ればさらに良い。
- ・メルマガは100%の効力ではないことを認識しておかなければならない。ライン、フェイスブックなどいろいろあり、これからもどんどん新しいものが出てくるだろう。それにも目を向けていかなければならない。
- ・「7 今後の取り組み」の中の「ゆるやかな連合体」は「ゆるやかな連合体に」したほうが良い。文化の再認識の話はなにより基本になると思うので、きちり書いておくべきである。センター開館に向けてのプラットフォームは、これから大きな眼目になっていくところだと考えている。ただ、他に比べてずいぶん具体的な印象である。
- ・条例については、大学で条文の研究もやっているのだが、他の団体とどう差別化するか

が問題となる。早くから議論が必要だと思う。具体的なところでは、助成金のあり方などをどう考えていくのかというところが今後の小田原の方向性の分岐点になるのではないかと考えている。

【深野氏】

- ・プラットフォームは問題解決の手段ではあるが、情報プラットフォームでは気付きはあるが、課題は解決しない。解決するのは主体者だけでしかない。
- ・今後の取り組みでは Face to Face の場で何かが生まれてくるのではないかと。まさしく課題解決に向けたコーディネーターの役割が必要なのではないか。小田原らしさは、こじんまり、自分たちだけでという印象がある。外の人にイメージとして理解してもらうのに極めて弱い。ひとが成長する、まちが輝くのは、小田原の人たちだけでやることではない。具体的な当事者が個別の議論をしていかないと解決しない。
- ・芸術文化創造センターのプラットフォームについては、顔を突き合わせるプラットフォームによる検討と開館前から情報発信をどんどんしていくという両輪で動いていかなければならないのではないかと。

【神馬氏】

- ・小田原は魅力的なものがたくさんある。情報に関しては、発信できない人から情報集める努力をしたほうが良い。小田原らしい文化が縦割りの壁を壊して何かできればいいと思う。

【露木氏】

- ・小田原の文化は一つにまとめるのは不可能で、それぞれの良さを知ってもらうことが重要である。それをどのようにしたらいいかということだが、レポーターによる情報発信は良い方法だと思う。小田原の面白さを発信するということになると突き詰めればそれは歴史なのではないか。しかし古いから良いというわけではなく、歴史と様々なものが関わる中で新しいものが生まれる。そこが重要である。新しい文化が生まれ、そのファンになってもらう。まず何があるかわからないので、まず発信、レポーターによる魅力の付け加えなど、地道にやっていかないと抽象的なものから抜け出せない。

【杉崎氏】

- ・文化のジャンルは地域独自のものや商業型のものなどいろいろある。今まで取り上げていないジャンルをどうするかは、文化政策課なりが考えていかなければならないのではないかと。
- ・商工会議所や青年会議所のメンバーは、小田原が大好きで、小田原ってなんだというテーマで集まってくると思う。彼らの情報網を利用したほうが良いのではないかと。ここで手を繋ぐことで、若い人たちと新しい何かができるのではないかと。
- ・文化連盟のメンバーについては、興味がないというか、メールの使い方がわかっていない人が多い。メルマガの活用方法、どうしたらメルマガに載るか、紙に書いてここに出してくれれば載りますよというメリットを具体的に示す必要がある。

- ・市民会館の跡地をどうするのかなど、プラットフォームの手段で、目に見えるように話題としたほうが良いのではないかと。話題にしない限り、市民には見えない。

【牛山氏】

- ・「見える化」に向けて、こういう情報がほしいという洗い出しと、読み手（情報を欲している人）の洗い出しが必要だと思う。網羅的な情報のプールから情報と情報をほしい人のマッチングをするにはどのようなメディアがふさわしいかということも、考える必要がある。洗い出しとマトリックスがないまま、情報活用の検討をやっていくのは難しい。
- ・もうひとつ掘り出しの問題がある。横浜はまレポ.com（<http://hamarepo.com/>）というウェブサイトがある。横浜に対する質問が投稿されるとライターが答えるという形式のもので、横浜在住でなくても、横浜に関わるライターやイラストレーター、カメラマンが密接に関わってコンテンツが成立していてすばらしい。取り上げる話題も幅広く、コンテンツや人材の掘り出しの方法として有効ではないかと思う。
- ・今度、ワークショップを開催するのだが、文化情報レポーターについては、参加者が当事者意識を持ち、楽しさや誇りを持って活動していけるように、活動が疲弊していかないように、続けていける仕組みが大事である。例えばプロのライターの人や写真家と一緒に仕事ができ、自分が発信者になっているなどが考えられる。
- ・また、ワークショップにしる、メルマガにしる、事業をやるからには評価が必要で、目的と実施と評価をしていく。目に見える成果目標を設定すべきである。

【小川氏】

- ・情報プラットフォームでも良いのではないかと。情報は今どんどん新しい媒体が出てきてしまい、民間が先にやって行政が追いかけるという形になっているのだと思う。図にメルマガと書いてあるが、ネットを使った伝達くらいの幅広い書き方をしておいたほうが良いのではないかと。
- ・文化は情報なのかというのは疑問で、やはり Face to Face が大事だと思う。でもそう言っているとなかなか進まないのと、とりあえず情報ということだろうと思う。
- ・議論の掘り出し、洗い出しは重要という話があった。5 ページに文化情報レポーターは魅力ある情報発信のため募集と書いてあるが、これは賛成するところである。
- ・文化事業レポーターの役割は事業のレポートだけにとどまらないのではないかと。東京都の文化発信プロジェクトのプログラムオフィサーという役割があるが、現場に一番近いアドバイザーのような役割を持っている。レポーターにどのように人をストックしていくか、一人ではなく様々な人がかかわるのが望ましい。この動き方を議論していったほうが良いのではないかと。
- ・条例の話で、先程、他の自治体と議論の場をという話があった。大変いいことだと思うが、市民は市民で考えておかないと、行政がどんどん決めてしまう。
- ・補助金などができたりするが、それ以上にやって欲しいことが市民側にはある。
- ・実験活用や試行事業など試しにやってみることが大事なのではないかと。暫定でも良いの

ではないか。失敗コミでまずやってみる。ほかにも公認メルマガを流すなども考えられる。学校との連携でも課題抽出をしてみて、プラットフォームも暫定的にここまでできているという形でも良いのではないか。

【畠山氏】

- ・文化は行政半分、民間半分くらいのつもりでやって欲しい。

【間瀬氏】

- ・条例について自治体の研究会の話があったが、条例を持っている自治体の担当者に認識がない。作って終わりになってしまっている。そういう意味では運用をどうするのかという議論をしていく必要がある。首長が変わっても文化を振興していくというためには、文化振興するための行政の法律を作っておかないといけない。それには条例しかないだろう。条例制定は市民を縛るものではなく行政を縛るものである。平成29年度前には条例を制定したい。その条例でいう文化政策の一部をセンターが担うという形になると考えている。
- ・小田原の文化の担い手については、芸術文化創造センターの課題としてプラットフォームで解決していくことになるだろう。
- ・文化資源発掘ワークショップは、小田原の文化資源を集めて最終的にはミュージカルのような成果物を作りたいと考えているが、そのベース作りのための動きである。新しい小田原の良さ、小田原の再認識にも繋がる。来年度注視していただきたい。

【文化部長】

- ・文化というものは無条件に大同団結し難いものである。そのために団体が高齢化するということは、ありえることである。大地震と芸術文化創造センター開館とは同じレベルにならないが、逆に文化は楽しみであったり、未来が語れたりするものである。そこは仕掛け方や話の仕方であったりするのであろう。

【鬼木氏】

- ・自治体の研究会の話をしたのは、まさに行政への不信感を払拭できる制度を考えなければならぬと思ったからである。小田原市の検討に合わせて、行政も時代に合わせて成長していかなければならない。他の自治体も一緒に検討していくことが必要である。
- ・文化振興は市民自治のひとつのあり方である。小田原の市民自治の根底に文化があり、そのための手段としてのプラットフォームであり、条例である。条例は市民のためのもので、市民の活動を条例が支えることになる。

【畠山氏】

- ・芸術文化創造センターは、開館から5年後以降が問題である。運営費を削る、維持管理費を削るということでは困る。水戸市のように、文化のための財源を確保することが必要である。競輪の収入を文化に使ってもいいと思う。
- ・市民のほうも、今のうちから、市役所頼みでないものを構築していく必要がある。

【石田氏】

・このような語る場を作るのが重要である。これは財産になると思う。

以 上